



グループディスカッションのまとめを発表する参加者

北方圏センターは(財)札幌国際プラザなどと今年度「多文化共生ワークショップ」を3回にわたって開催し、外国人居住者と共に暮らす環境づくりには何が必要か等を学び、話し合った。その第3回目が去る1月29日(土)午後に関

かれ、北海道および札幌市内外で外国人支援のために活動する自治体職員、国際交流協会職員、市民団体などから40名が参加してグループ討議などを行った。

今年度最後のワークショップでは、これまで2回のワーク

ショップでの講演^(※)やグループ討議などを振り返ったあと、外国人居住者を交えてグループ毎に「どのような連携の取り組みがあればよいか」をテーマに話し合った。

LIBRARY INFORMATION JICA札幌図書室

図書資料、映像資料併せて約9,800点の資料を所蔵しております。

日本語の資料は国際協力、世界の国々にまつわる資料を中心に約5,600点あり、どなたでも自由に閲覧できます。

JICA札幌は北海道における国際協力に関する情報の提供を目的とし、1996年に図書室を開設しました。「JICAについて知りたい」「開発途上国について知りたい」「国際協力について調べたい」という皆様に

に応えられるようたくさんの図書、ビデオを取り揃えておりますのでどうぞご利用ください。

また、当図書室所蔵のビデオ、DVDの視聴が可能です。所蔵図書に関することなどもどうぞお気軽にお問い合わせください。

新着図書資料です

『13歳からの平和教室』

平和についておじいちゃんが孫からの質問にやさしく答えます。読みながら一緒に考えましょう。「なぜ『平和は大切』なんだろう?」、「『人間としてふさわしい生き方をする』(人間の尊厳を実現する)ということ」、「21世紀の国際社会がするべきこと」など。

「平和」ってどういうことかな。身近なことから「平和」を考えましょう。

著者は広島大学広島平和研究所所長です。

第3回 多文化共生ワークショップ 今年度「多文化共生ワークショップ」を振り返って

多文化共生を担うのは誰か、生活情報等を多言語化したり、アクセスしやすくするには、行政機関、NPO等、交流団体、自治会そして外国人住民が、それぞれの得意分野を生かして「総働」することが求められているとし、次回のワークショップに向けて今後の取り組みをまとめ、事業化を模索する。今回は平成23年5月21日(土)に第2回に講演された田村太郎さんを迎えて開催の予定である。

当日急遽参加した第1回目の講師、志渡澤さんが、開

“多文化共生” 恵庭市の取り組み ～LET'S 多文化コミュニケーション～

昨年10月に開催した第2回ワークショップに参加した恵庭市企画振興部の太細幸治主幹が地域内FM放送を利用した外国人居住者による外国人居住者向けの情報番組を開始したことを報告したほか、同市ではいくつか多文化共生の試みがなされている。

1月30日(日)午後、恵庭市民会館で開催された「多文化共生懇話会」では、多文化共生マネージャーの認定をうけた北方圏センター交流部の小田島道朗が「～多文化共生に係わる事例発表～」として北海道内の様々な外国人受入状況や北方圏センターの取り組みなどについて講演した。また、パネルディスカッションでは、互いの文化を理解しあい、住みやすい共生の地域社会をつくろうと、市、恵庭国際交流プラザ、在住外国人2名が地域の状況などを話し合った。

(主催:地域FM放送 e-niwa 後援:恵庭市)



JICA札幌図書室

JICAの事業紹介ビデオ、教育分野の図書など一部の資料の貸し出しをしております。

貸出対象者: 18歳以上の方
(運転免許証等の身分証明書を必ずご持参ください)

期間及び貸出可能数: 1週間、2点まで

尚、貸出対象ビデオ、教育分野図書、毎月の新着図書資料の一覧表をJICA札幌ホームページにて公開しております。

〒003-0026 札幌市白石区本通16丁目南4番25号
TEL.011-866-8306 FAX.011-866-8302

E-mail: jicasic-lib@jica.go.jp

OPEN: 月～金 9:30～19:00 土 9:30～16:30

CLOSE: 日曜・祝日・年末年始

発行日: 2011年3月11日
TEL.011(221)7840 FAX.011(221)7845 <http://www.nrc.or.jp>
E-mail: pbl@nrc.or.jp (出版部) intc@nrc.or.jp (国際協力部)
印刷: 岩橋印刷株式会社

Northern Regions Center (NRC)
社団法人 北方圏センター
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館

北海道の国際協力情報紙

vol.60 2011 SPRING

であい



Northern Regions Center (NRC)
社団法人 北方圏センター



みんな元気に集合

るトゥール・スレン博物館、貧しい家庭の子ども達の就学支援を行う民際センター(EDFカンボジア)、難民経験者が設立したスナードイクマエ孤児院などを訪問、子どもや青年達と交流を通して様々な経験をしてきた。

「気づき」、「振り返り」、「共有」の機会に

恵まれない環境にある子どもたちの厳しい現実や内戦のつめあとを目の当たりにした視察中の毎日、考え、振り返りを続け、参加者同士の思いを共有するなどした高校生たちは、9月に開かれた事後研修会で、「途上国のイメージを決めつけない」、「皆が学んだことを共有することで多くを学べた」、「知ったことを伝えたい、伝えなければ」など気付いたことをレポートにまとめ、発表した。また、11月上旬から2月上旬にかけては、3チームに分かれて小学校3校、中学校4校、高校1校(複数回)と順次訪問して自分たちの体験を発表する報告会を重ねた。

チョムリアップ・スオ(クメール語でこんにちは) @岩見沢市立北真小学校

12月21日(火)、高谷茜さん(札幌北斗高校)、星山侑佳さん(札幌国際情報高校)、宮田由季路さん(札幌丘珠高校)ら3名が、岩見沢市立北真小学校(土田耕一校長。児童数158人。岩見沢市稔町30-7)の4年生35名のクラスでカンボジア訪問の体験発表等の報告をした。

総合的な学習の時間に学校外の人を招いて海外の様子などを勉強している北真小学校。高校生の発表の前、担任の越山真史先生の「前にカンボジアの話聞いたことを思い出してください。どんなことを覚えていますか?」という質問に、水上で生活する人々、今も地雷が埋まっている場所がある、学校が足りなくて1日を2回に分けて通学することなど児童たちは次々に答えた。つづいて、「チョムリアップ・スオ」と挨拶してその日の報告会を始めた。映像を見せながら、「カンボジアの面積は?」、「カンボジアの人たちの主食は?」、クイズ形式で質問を投げかける高校生の声に児童たちは競い合うように手を挙げていた。カンボジアで食べられているという虫の佃煮(特にクモのタランチュラ)の話にクラスは大騒ぎになったが、食文化の違いを知る良い例になった。

最後に、「栄養が不足していて、日本の子どもより体が小さいカンボジアの子どもも、遊ぶときは同じように元気いっぱいに走り回っていました。カンボジアに行く前にはマイナスイメージばかりでしたが、子どもたちの姿を見て自分の考え方が大きく変わりました。みんなもいろいろな国に行ってみてください」と話を終えると、子どもたちは「はい!」と元気に答えこの日の報告会を終了した。 みんな、オー・クン(ありがとう)。



高校生たちが得たこと

今回の視察で、参加した高校生たちは様々な経験を積み、学んできた。

カンボジアの孤児院で何かを伝えたくて自分を通訳のところまで引っ張っていった少女の話に例に、「言葉は通じなくても、知りたい、伝えたいという気持ちがあれば思いは通じます」と報告した人。「保護施設で暮らす幼い子ども達が自分たちで食事の準備や片付けなどをする姿を見て日本に帰ってから自宅の手伝いをするようになった」という人。「貧しくて可哀想だと思っていたカンボジアの子ども達が明るく元気で自分と少しも変わらない」と感じた人。さらにまとめたレポートには、一番の印象は「子どもたちの明るい笑顔」、一方で、「ワンダラー、ブリーズ」と言って小銭を求める痩せた子ども達を無視しなければならなかった苦しさから、自分の無力を感じたと率直に振り返る言葉もあった。

帰国後に回を重ねた報告会を通じて、「報告会の前は不安と緊張でいっぱいだったが、中学生が一生懸命に聞いてくれてやり甲斐を感じた」と喜び、「自分の言葉で伝えたいと思った。真剣に思いを伝えることは楽しいことだと初めて気付いた」、「自分たちの話すことがカンボジアへの印象を決めることになるので責任を感じた」、「発表チームの中で自分の責任を果たすことや協力することの大切さを実感した」と語り、さらに言葉違いや話の間合いの取り方など人前で話す難しさも多々学んだようであった。

特集

開発教育ファシリテーターと

参加する国際協力・環境問題ツアー

高校生、カンボジア王国で国際協力について研修、帰国後に報告会



農業に進むことを決意

西脇 佳代 さん
農業(江別市在住)

私は、江別市で両親と3人で水稲・小麦・大豆等を作っています。昨年就農し、後継者として主に野菜の収穫や草取り、ロータリー掛けなどをしています。一昨年までは青年海外協力隊員としてセネガルで活動しており、そこでの2年間で私を大きく変えました。

セネガルはサハラ砂漠のすぐ南に位置し、年間400mm程の雨しか降りません。そこでの私の活動は、砂漠化が進んでいる村にマンゴーやユーカリの木を植えることでした。

子どもの多い農村では、マンゴーは大切なおやつです。仕事のない女性でもマンゴーを街で売れば、貴重な現金を得ることができます。また、ユーカリの木は真っ直ぐなため建築用木材として常に需要がありました。しかし村人が木を植えたくても、知識も資材も足りません。そこで私が必要な資材を届け、村々で技術の共有ができるように橋渡し役となりました。また、水不足で苗を育てられない村に井戸を掘る支援も行いました。

連日40度を超す暑さの中、農民は黙々と農作業をしています。厳しい環境のセネガルと比較して、初めて日本の農地の豊かさに気がつきました。「耕したくても耕せない人々が日本の土地を

見たらいったいどう感じるのだろう」。そんなことを考えていました。セネガルの人々は決して豊かではありませんが、みんなが幸せを実感しながら暮らしていました。家族で農作業をし、夜は星空の下で語り合います。お金が無くても助け合い、物が無くてもあるもので工夫して暮らしています。「家族みんなが幸せなら幸せの総量が多くなる。その方が幸せだ」とセネガルが教えてくれました。

セネガルで自分の将来をじっくりと考えた結果、農地を大切に、家族と仕事ができる『農業』という道に進む決意をすることができました。これからは、セネガルで活動してきたように、人と人とが繋がるきっかけを作れるような農業者に成長していきたいです。

青年海外協力隊 平成19年度2次隊派遣
職 種:村落開発普及員
派遣国:セネガル



村の夫妻と

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センターから

札幌国際センター・帯広国際センター

北方圏センターが行う、JICAの国際センター（札幌市・帯広市）に滞在する研修員等が参加する様々な行事等をこのコラムに掲載します。

「新春文化塾」（札幌）

1月29日（土）、研修員たちによる若松と赤芽やなぎの春らしい生け花作品が飾られた札幌国際センター館内で、ひととき、なつかしい日本が出現した。滞在する研修員に日本のお正月の雰囲気味わい、昔遊びを楽しんでもらおうと毎年開催されている「新春文化塾」。この日の午前中、研修員はボランティアの皆さんによる初釜でのお点前（吉田迪子さんほか6名）に舌鼓を打ったほか、輪投げ、剣玉、竹とんぼ、だるま落としなどの昔遊びを体験し、ロビーではボランティアによる南京玉すだれ（小林マリさんほか2名）や尺八と琴の演奏（杉本史子さん、大瀧光悦さんほか史響会メンバー4名）を堪能。



尺八と琴の演奏を聴く研修員のみなさん

また、午後、昼食会場では30kgもあるマグロの解体ショーやにぎり寿司の実演（寿司の家かっぱの職人さん2名）を満喫していた。当日は各国から来ているJICA研修員やボランティアなど90名以上が参加し、中には法被にサムライの髪を被った人たちもいて和気あいあい「お正月」を楽しんでいた。



「そり滑り体験」（帯広）



1月23日（日）、帯広の森、ミニスキー場には、サモア、イラク、ベトナム、インド、ジャマイカ、タンザニアなどからのJICA研修員23名が集結した。この日の最低気温はマイナス7.7度。この冬1月の帯広では2番目に“高い”最低気温の日であった。

手袋の中には小カイロ、ほかに足先用、体用カイロを身につけて午前10時からチューブやソリなどでだらかな斜面を滑ったり、その場に居合わせた子どもたちと一緒に遊ぶ研修員もいて、土曜日の午後に自由に楽しんでいた。

国際交流 in 積丹

天気恵まれた11月20日（土）～21日（日）の2日間、「国際交流 in 積丹」が開催された。積丹町での交流会は今年で10回目。北海道海外技術研修員や北大留学生など7カ国13名が参加し忘れがたいひと時を過ごした。

初日は、松井積丹町長を表敬訪問。その後、この節目を祝しての記念行事を開催した。積丹町の小中学生や保護者を交えてゲームやクイズ大会、さらに積丹特産のかぼちゃを使った「かぼちゃだんご」やブラジルのお菓子「ブリガディオ」を作る料理交流を行った。その日の締めくくりは「ダンス交流」。研修員・留学生は南米で流行した「マカレナ」を披露。その後、はっぱを着て「ソーラン節」を輪になって全員で踊り、会場は和やかな雰囲気包まれた。

翌日は町内の小中学校5校での学校訪問。子ども

たちはクラスに研修生や留学生を迎える準備を何週間前から始め、この日を楽しみにしていた様子が表情にあらわれていた。研修員・留学生も、小・中学生にわかりやすいように写真や動画を駆使した母国紹介のプレゼンを行った。その後も、外国語の挨拶の練習や遊び、学校によっては餅つきや工作をするなど、互に楽しいひと時を過ごした。子どもたちはこの日の交流を通じて世界を身近に感じ、さらに外国人参加者も積丹町の子どもたちを通じてどさん子の温かな心に触れたのかもしれない。

2001年9月にスタートしてからまる10年。積丹町、町教育委員会、学校関係者、地域の方々の理解があって続いてきたこの事業。当センターも長年関わる中、子どもたちが物怖じせず研修員・留学生を迎え入れる姿を目の当たりにし、事業の成果を実感している。研修員・留学生にとっても積丹での思い出がいつまでも心に残るのであろう。心と心が結ぶ積丹町と世界の絆がさらに深まり続くよう願っている。

イベントレポート



10周年おめでとう



子ども達の盛大な見送りを受けて

た12月中旬のことで、今頃はどこかで滑っているかも）。

韓国の学生はアルバイトをしていません

留学して一番驚いたのは日本の学生がアルバイトに熱心なことで、ソウル大学の学生は家庭教師以外はほとんどしないという。朴さんは大学のサークルに参加して、週2回仲間達とアコースティックギターの演奏を楽しんでいる。今回も帰り際に押尾コータローの「トワイライト」をつま弾いてくれた。

「国際交流 in 積丹」に参加

積丹町（教育委員会など）と北方圏センターが行っている交流事業に参加して余別小学校（児童数6名）を訪問した。「韓国ってどんな国？」などの説明を最初は普通



に聞いていた子ども達がキムチやチゲ鍋など韓国の美味しい話になった途端、「表情が変わって盛り上がったのが可愛らしかった」という朴さん。ご自身もサンマなどの北海道の新鮮な魚を絶賛していた。

留学日記



朴 晟鎮さん（大韓民国・ソウル市出身）

もう一度、北海道に来たいと思います

「もう一度来たい」と思った北海道

自然が豊かな北海道に住んでみたい…

韓国のソウル大学と北海道大学との交換留学で昨年10月初めに来道し、文学部4年に在籍して、日本史を学んでいる。「ソウル大学では西洋史を専攻していますが、日本に来たのだから日本史を勉強することにしました」。日本語能力試験1級に合格して日本語は堪能。

「実は、大学1年の冬休みに北海道を旅行しました。函館、小樽、網走、釧路まで独り旅をして、その時に北海道の自然の雄大さに感動して、もう一度来て、ここに住んでみたいと思いました」。今は北海道に来たからにはスキーも体験してみたいと話していた（まだ雪が少なかつ

ソ連（当時）の貨客船「インディギルガ号」が猿払村沖合いで浅瀬に乗り上げて横転したのは、1939年（昭和14年）の12月のことであった。1,100人の乗客乗員のうち702人が死亡する遭難事故になった。この時猿払の人々は村をあげて遭難者430人を救助した。

隣の家とは仲良くし、助け合う

時代は東西冷戦のさなかであったが、村では慰霊碑を建立して毎年遭難者慰霊祭を行っていた。それが端緒になって両村は1990年（平成2年）友好姉妹村提携を結び水産加工研修生の受け入れなど経済交流事業につながった。同時に学童交流事業を進め、2004年（平成16年）まで累計754名の中学生がオジョールスキイ村を訪問するなど友好関係が続いていたが、2004年、両村の経済事情もあって定期的な交流は途絶した。

2009年、ひとつの新聞記事が交流再開へ

現在、稚内市で中学校教師をしている松井くるみさんは、中学3年の時に村の学童交流に参加してオジョールスキイ村を訪れた。その時に受けた温かいもてなしに感動してロシア（旧ソ連）への想いを深めた松井さんは、村の交流に役立たいとその後大学でロシア語を専攻、ロシアの大学への留学も果たした。



松井くるみさん

留学中に受けた取材の中で、故郷の村のオジョールスキイ村との交流を「夢をくれた」と語ったことが両村の人材育成のためにも交流再開という気運を生み、両村は協議の結果、本年児童、生徒の交流を中心にした交流の再開を決めた。

猿払村の総務課長補佐眞野智章さんは、「年月はかかりますが、国際交流事業は人材を育成します」と語り、今、中学生を前に日々教壇に立つ松井さんは両村の交流を振り返って「いつか再開したらいいな、とずっと思っていた交流が再び始まることをとても嬉しく感じます。たくさんの子供たちが温かいオジョールスキイ村の人々と接し、異文化を肌で感じることで、広い目で物事を捉えられるようになる良いきっかけなればと思います」と、交流を経験した子供たちが中心となって、これからの交流が末永く続くことを願っている。



オジョールスキイ村代表団来村



取材を受けた記事
（二〇〇九年一月十一日 北海道新聞）

ジンバブエの民俗音楽グループ「ジャナグル・ジュニア」夏に来道、公演

ジンバブエのアートセンターで伝統音楽と踊りを学ぶ子ども達のグループ「ジャナグル・ジュニア」が今年も北海道にやってきて、各地で公演する。主催者は公演する会場などを募集している。詳細は実行委員会の吉岡さんまで（小樽ローズ幼稚園 TEL 0134-22-1406）。「であい」Vol.58に記事掲載。



交流再開

「交流に夢をもらった」、当時の中学生の想い

72年前、当時のソ連貨客船の遭難事故に遡る両村の交流

猿払村、

サハリン州・オジョールスキイ村との